

市民学習会：第51回戦後教育史を学ぶ
 倉林順一さんのライフヒストリーを聞く
 愉快な仲間たち
デリシャスカンパニー
 ー高経大附転学運動で育った生徒たちー

〒371-0026 群馬県前橋市大手町 3-1-10 教育会館内

Tel & fax 027-235-8876

‘08. 7. 3 (木) 発行

群馬県高校教育研究所発行：編集/橋本寛文

6月14日(土)午後2時より前橋市総合福祉会館で、標記のテーマで現職の倉林順一さんのライフヒストリーをお伺いしました。中学一年の入学式で倒れて以来、闘病生活の中で青春を過ごしました。大学時代に健康を取り戻し、大泉高校で教員生活をスタート。松井田高校



係を崩すだけと考え、生徒と共に生きる決心をします。高市女に移り、廃校・転学運動に遭遇、闘うことで生徒も教師も共に

成長できることを確認します。お忙しい方は、22pの(4)「間違いを間違いだといえる人間

では信頼関係を築けた生徒から「オラァ、先生なんかでっえ嫌えだ」と言われ、これを機に、力づくの指導は結局は信頼関

に」からお読みください。

尚、正確さを期すため加筆・訂正、付記があります。

目	次
1.闘病5年で高校卒業	(2)「強い指導」の誘惑……………13p
(1)療養専一に……………2p	4.デリシャスカンパニー
(2)教えることが分かること……………4p	(1)男女共学のはずが……………14p
2.職場が私を育てた	(2)雨の中のデモ行進……………18p
(1)若い仲間たちと……………7p	(3)理想的な学校って差別するの？ 19p
(2)「そういうんでいいんですか、先生」…9p	(4)間違いを間違いだといえる人間に 22p
3.グッドカンパニー	5.民主主義が育て、民主主義が育った 26p
(1)先生に「またやられた！」……………12p	[付]答辞全文……………32p

平野:市民学習会「戦後教育史を学ぶ」は51回目となりました。現職の倉林さんをお迎えし、高崎市立女子高の高崎経済大学付属高校への転学運動の中で生徒たちがどのように育っていったかのお話を中心にお伺いしていきます。まずは倉林さんがどのような経緯で教師の道をお選びになったのかから伺っていこうと思います。先生は高校を5年間かかってご卒業したということでしたが、どういうことだったのでしょか。

1.闘病5年で高校卒業

(1)療養専一に

倉林:私は埼玉県児玉町(現本庄市)の町役場の職員の長男として生まれました。父は海軍の職業軍人でしたが、戦争中に静岡生まれの母と結婚し、戦争が終わった時に横須賀から実家の児玉町に引き上げて実家の近くに住みました。翌年に姉が、2年後に私が生まれました。母は病弱で、私を産んでから10年間、入退院を繰り返す生活をしていましたから、小学校に上がるまでは農業を営んでいる父の実家に預けられる時間が多く、大家族の中でにぎやかに暮らしていたので母のいない寂しさを感じることはあまりありませんでした。近くの小川で遊ぶのが大好きで、シジミやタニシをとってくるとおばあちゃんが佃煮にしてくれました。川普請のときには大人たちが引き揚げた後で、石垣の間からウナギが出てくるのを

待っていました。私が見つけたウナギは家に持って帰ると大人に食べられてしまいました。夜になるといここに連れられて火振り漁に行きました。大きいドジョウが寝ているところを手製のヤスで突いてとります。私の言い方にならって友達には「おばあちゃんちの川」と呼んでいましたが、この川も今はコンクリートで固められてしまいました。

小学校2年生になるときに町中に引越して学校も変わりました。4年生の時に、手術を繰り返してやっと病状が安定した母が帰ってきました。母自身が帰宅を喜び、10歳の私を膝に抱いてくれました。私には母に抱き締めてほしいという欲求はなかったのですが、母にとっては必要なことだったのだらうと思います。母は、この後は見違えるほど元気になったのですが、それまでの闘病生活で散財し、父や私たちに迷惑をかけたと言いつけました。母は裕福な家に育ち、東京で女学校生活、銀行員生活を楽しんだ人で、田舎での農家の大家族との生活は神経を遣ったようです。若いころ親しんだ讃美歌や西洋の歌を歌ってくれました。父が南方に行っていた時に歌ったという軍歌も聞かせてくれました。私たち姉弟は母が浸っていた文化をずいぶんと受け継いでいます。優しい母でしたが、私は夜は父と寝る習慣を変えませんでした。布団に潜って父の体に包まれるようにしていると安心でした。

小学校生活の中では図工と体育が好き

でした。スケッチブックに美空ひばりの似顔絵や赤胴鈴之助の絵を描いて両親に褒められたことを覚えています。歌を歌うことも好きでした。作文は苦手で、いつも母に手伝ってもらいました。自分では考えようとせず「次は」「次は」と言って聞き書きしました。母も「自分で書きなさい」とは言いませんでした。

中学の入学式で目眩がして倒れました。病院にいったら、即入院。結核でした。2ヶ月ほど入院しましたが、幸いなことに復帰できましたが、それ以来、大学まで体育の授業に出たことはありません。この入院のころから、自分自身の将来を意識するようになりました。それは「夢を持つ」というような意味ではなく、「大人になれるのだろうか」「友達と一緒に高校に行けるのだろうか」という不安のようなものがまとわる将来です。しかし、特に体が痛いわけでもなく、動けない状態でもないのです、実際にはいたって普通の暮らしをしていました。

ところが、中学三年生の1月、再び体調が悪くなり、高崎の国立病院に入院しました。咳や痰に悩まされるようになりました。

平野:間近に受験が迫っていますね。

倉林:外出許可を貰い、受験しました。合格しましたが、入院中ですので、入学式に出ただけで、あとは欠席です。担任が「君は児玉から来ているのか。遠いから大変だろうが頑張れよ」といつてくれたのを覚えています。

平野:入院のことは言わなかったのですか。

倉林:私からは言いませんでした。父が担任の先生に話したようです。

平野:ところで、病院生活はどんな風でしたか。

倉林:碁打ちに専念していました。一緒に生活した患者さんたちは私のような少年はいません、オジサン・オバサンたちばかりでした。私は小さいときから父に碁を教わっていたのですぐに囲碁仲間に参加しました。オジサンたちは私を子供と思わずに喧嘩を売るようにして打っていました。父親の棋風も入院患者の棋風も同じように筋悪の喧嘩碁でした。あとで大学に入った時も囲碁部にはいましたが、先輩たちに「お前の碁は筋わるだ」と言われました。相手をとことん追いつめていく碁打ちだったのです。

15歳の中学三年生は小児科の患者でしたが結核病棟に入れられました。ですから、若い人は女子高生が一人だけでした。勉強するような雰囲気はなく、ただ可愛がられて、碁を打って過ごしていた感じです。父親が面会に来るたびに碁を打ちましたが、その度に置く石が少なくなっていました。父はそれがとても嬉しそうでしたね。

平野:高校へ入学したのですから、教科書は持っていたでしょ。

倉林:父からの手紙に「療養専一に」とありました。言いつけを守って、身に沁みて勉強したことはありませんでしたね。

それでも、3ヶ月経ち、半年も経ちますと、流石に不安が諦めに似たものに変わっていきました。結局、13ヶ月入院し、1ヶ月ほど自宅療養して、翌年の4月から再度一年生になりました。

(2)教えることが分かること

平野:年が一つ上なのは意識しましたか。

倉林:そういう意識はありませんね。ただ、授業についていけるかどうか、置いてかれてしまうのではないかという不安がありました。遅れているという意識の方が強かったですね。

平野:その後は順調だったのですか？

倉林:勉強についていけないかもしれないという不安は残りましたが、2学期には美術部に入り、特に木炭デッサンに集中できて、高校生活は楽しいものでした。二年の夏休み、友達と海水浴へ出かけるまでに回復していたのですが、これがいけなかったようです。疲れからか咳が止まらないのです。9月にまた高崎の国立病院の診察を受けました。気管支炎のような気がすると訴えたのですが、医者はそれは枝葉の問題だということです。結核の再発を疑っていたようです。しかし、気管支造影をしました。当時は椅子に座って上を向いた状態で喉から管を挿入するようなやり方でした。そこからバリウムを流し込んでレントゲン撮影をします。でも、喉の敏感な私は咳き込んでしまって、失敗してしまいました。それで、専門医のいる前橋病院に移り、再度

造影を試み、今度は名医だったせいか成功し、両肺に枝葉のように広がる気管支に小豆粒のような拡張部分がいくつもくっついているのが分かりました。しかし、病気が両肺に及んでいたために手術は不可能、抗生物質の投与でしのぐことになりました。この薬が劇的に効いたらしく、翌3月には退院、4月に復帰できました。

平野:二年生を2度やることになったのですね。

倉林:二度目の二年のころから私は英語の勉強に興味をもつようになりました。ただ、訳すのではなく文章を読んで、内容を楽しむ習慣が身についたのです。モームの「作家の手帳」の文章が気に入っていました。「苦痛はそれが肉体に帰すると確信することで耐えることができる。」というのですが、ちょっとした支えになっていました。理科は苦手で、さっぱりでした。釣りが好きでしたから、将来は魚の研究でもと理系を目指そうという思いもあったのですが、なにせ、数学・理科が苦手なと身体から考えて無理と判断し、文系にしました。医者は理系でも差し支えないといっはくれたのですが…。絵を描くことが好きでしたからそちらの方面も考えたのですが、高校時の美術の先生に良いモデルを見出せなかった(笑) ことも手伝って止めました。

平野:いつごろ、教師になることを意識し始めたのですか。

倉林:二度目の二年生の時ですかね。英語の文法の勉強をしているとき「他人が分

かるまで教えられるように勉強すればよく理解できる」ということに気がついたのです。それからはどういうふうに説明すれば分かってもらえるかを意識して勉強するようになりました。それが教師を意識する最初だったと思います。

ある国語の授業で先生が「けしからん親がいる」と言い出したことがありました。三者面談の際、ある母親が「先生！ウチの子は頭が悪いんで教師にでもしようかと思うんですが…」と言ったというので憤慨していました（大笑）。当時は理系なら工学部、文系なら法学部がステータスの時代だったんですね。

平野:ご家庭では教師を選ぶことに不満はなかったのですか。

倉林:ありませんでした。母親は自分が病弱だったこともあって「私のせいでお前が苦勞して…申し訳ない」の一点張り、父親からの注文はただ早く身体を直せということだけでした。私自身、机に向かってする仕事や営業のような仕事にたいする意欲はありませんでした。

平野:卒業に際して進路選択はどうしたのですか。

倉林:経済的余裕があるわけではなかったもので、授業料の安い国・公立ネライでした。しかし、見事に1期・2期とも落ちて1年間浪人します。その間、いろいろアルバイトをしています。本庄市でアンケート調査の集計をする社会調査研究所、薬局事務、高校受験生の家庭教師などをしました。

平野:で、いよいよ受験…

倉林:数学はだいぶ分かるようになっていましたが、どうしても理科がダメでした。それで、理科を選択しなくても済む大学として絞り込んだのが横浜市立大学文理学部だったのです。

平野:70年ですから、大学紛争で東大の入試がなくなり、受験生が横浜に流れたときでもあったのですね。で、どうして、教師を目指したのか…。

倉林:ゆくゆくは家へ戻って両親と一緒に暮らそうと考えていました。姉は結婚して家を離れていましたし、長男でもあったので…。事務には向かないと思っていましたし、教員かなと考えていましたね。

(3)四年次に69単位＋卒論12単位

平野:大学生活はいかがでしたか。

倉林:美術部へ入ろうと思ったのですが、木炭デッサンは余りしないようなので止め、囲碁部に入りました。喧嘩碁でしたので前にも言いましたが「スジが悪い」と見破られました。

平野:サークル活動中心の大学生活だったのですか。

倉林:私が入った寮は東京湾に面した金沢八景の漁師町にありました。今は埋め立てられて、金沢八景島シーパラダイスになっていますが、大学なんか行く気にならないほど素晴らしい環境でした。私は元々釣り好き、季節ごとにいろいろな魚が釣れる防波堤に通い詰めていました。

夏になると大潮の日の干潮の時刻に海に出ると、いつもは海の底にあった岩が出てきてその裏に手を入れるとイシガニがとれました。軍手を指先が余る程度にはめて手を入れると蟹が指先を挟みます。そこでゆっくりと引き出します。甲羅が手の甲くらいの大きさで、ハサミの肉は少ないのですが、

茹でると味噌がうまい。寮の庭でビールをのみながら食べました。秋はアジやサバが群れをなして回遊してきます。針をたくさんつけたさびき仕掛けで一度に何



大学2年のとき友人と霧積温泉にて

匹も釣ります。春先のウミタナゴ釣りはほとんどヘラブナ釣りと同じで、私にとっては馴れたものでした。学校どころではありません。(笑) 朝に夕に釣り三昧。それに、夜眠っていると、先輩が耳元で囁くのです。「倉ちゃん、おきなよ、みんなが待ってるよ」(大笑)。マージャンのお誘いです。初めのころは負けてもお金をとらないのです。「いいよ、無理に誘ったのだから」「後でしっかり貰うから、今はいいよ」。(笑)これが怖いのです。あとでしっかりとられました。取り返さなければ…とすっかり嵌まってしまった。朝までマージャンをして昼ごろ起きだして、ぼーっとして釣りに行っての繰り返し。

平野:大学紛争のときにですか。

倉林:寮は体育会系で、どちらかといえば体制側ですから、学生に殴られケガしたほうです。私はほとんど無関心で磯と戯れていました。でも、大きなデモなどが予定されていると教官が「休講します」とよくいっていましたから、学生運動の

残滓はあったのですね。

平野:学校へ行かずに単位取得は心配なかったのですか。

倉林:4年間で卒業しましたから、順調といえば順調です。

でも中身は、一年で27単位、二年で10単位、三年では8単位。だんだん少なくなっていました。大学紛争後は専門課程への進級に単位制限がなくなっていたので、単位が不足していても専門課程にいったのです。しかし、四年次に69単位+卒論12単位をとらなければなりません。午前2時限、午後2時限、月曜から土曜まで夕方までびっしり詰まっていました。

平野:四年次は卒論だけというのが普通だったのにね。で、就職活動は?

倉林:埼玉と群馬の教員採用試験を受けました。教員採用試験の勉強をしようと思ったのですが、友人から教育理論の勉強など意味がないと言われて、そうかなと思って止めました。教職教養などは全

くできなかったと思います。今、教員採用試験の受験生のお手伝いをしていますが、今だったらまず受からないだろうと思います。幸いなことに両方とも二次面接まで行きました。埼玉の面接で、県北に勤務することを希望したところ、「教育関係に知り合いがいますか」と聞かれ、「いない」と答えたら、「任地は県東部になるだろう」と言われました。そのやり取りが気になってその後にあった「春日部地区への赴任」の話は断りました。二月下旬に群馬県教育委員会から「校長と面接してもらいたい都合は？」との電話を受けました。「実は、単位が取りきれいでないの…」 「じゃあ、単位の見込みが立ったら連絡ください」(大笑)。まだ悠長な時代だったのです。流石に69単位は多すぎましたね。ドイツ語・統計・道徳・倫理の単位が認定されませんでした。「先生！教育委員会から電話がありまして、先生の単位だけいただければ決まるのですが…」 同じことを言って先生方を回りました(笑)。これでくれるのです。でも、「倫理学」の先生は厳しかったですね。中々ウンといってくれません。最後に、「倫理学は勤めながらも勉強できるからちゃんとやるかい？」とおっしゃるので「はい」と返事していただきました。「道徳」は断られました。これをとっておかないと中学の教員免許がもらえないのです。でも、高校からの話でしたので諦めました。あとで成績表をみるとちゃんと単位をくれていました。仏

様のような方でありがたいですね。(笑)

県庁で大泉高校の校長先生の面接が来て、教員になれる見込みがつかまりました。

朝までマージャン、午後潮干狩りに魚釣り、部活で囲碁の大学生活でしたが、その間に身体はしっかりしてきたようです。心も少し。

平野:それでいよいよ、大泉高校で教員生活をスタートさせるのですね。ここで休憩を取って、後半は大泉高校のお話から伺って生きます。

*****<休 憩>*****

2.職場が私を育てた—大泉高校時代—

(1)若い仲間たちと

平野:中学三年生末から闘病生活や大学時代の学生寮での体験などを踏まえて、いよいよ教員生活をスタートさせるわけですが、最初の大泉高校の印象はどんなものだったのですか。

倉林:農業高校だったのですが、大泉高校を知っている大学の後輩がいて「先輩、あの学校はイモ校と呼ばれていて、勉強の得意でない子が行く学校だそうですよ」と聞かされていました。私の先入観があったせいもあって、生徒もそういう意識を持っているように見受けられました。女子は普通科3クラス、男子が農業・園芸・畜産・土木の4科4クラスでした。農業4科は男子がほとんどだったのですが、女子に制限が加えられていた

わけではありません。土木科に女子が一人入ってきたことがありましたから。「総合高校」と当時の校長さんは言っていました。元気な子が多くて、生徒と取り組み合いのような生活が始まりました。私にとっては初めての学校ですから、どこかと比較するようなことはありませんでしたが、毎年数名ずつ新卒が採用されていましたから、若い教員が大勢いました。ですから、よく遊びました。今の職場を見ると、若い教員同士が遊んでいるのだから心配になりますが、私たちはほとんど下宿でしたから、就業時間が終わっても帰らないで、学校のどこかに溜まってワイワイやっていました。で、誰言う

ともなく、じゃアこれから飲みに行くかということになり、宴会になるのが定番でしたね。私の少し上に、柴田武志さん、淡島慧さん、瀬山眞二さ

ん、大崎博章さん、静喜昌さん、渡辺正道さん、柿沼一郎さん、真下治孝さん、横堀新一さんたちがいました。下には新井基和さん、斉藤和之さん、後藤豊さん、鴻田孝之さん、堀込啓一さん、橋本雅彦さんなどです。瀬山さんは酒豪でした。



大崎先生は分会書記長として新任の私を組合員に加入させました。淡島さんと後藤さんは山岳部でいっしょ。斉藤さんは生徒たちの自主活動を指導する中心的役割を果たしていました。よく飲みました。スキーにも行きました。テニスもおぼえました。堀込さんはやがて赴任してきた島津さんと結婚されました。

平野:そういう生活をしていても健康上の不安は感じませんでしたか。

倉林:薬を飲みながら (大笑) …。私は中学一年で倒れてからずっと抗生物質のお世話になっていましたから。一時、耐性を心配した医師の判断で止めたことがあったのですが、一気に炎症が広がって40度

も熱が出て大騒ぎしたことがありました。以来、その時々で最適な抗生物質を処方してもらい何とかやり過ごしてきたという感じですが、こんなふう若い仲間と一緒にいたから、大学時代と

同じように楽しい生活でした。

組合活動も凄く盛んで、職員が80名近くもいた学校でしたが、組合員が90%はいました。それで、年齢を超えて交流することが非常に多くて、それが職場づくりに大いに役立っていたと思います。職

員会議を例にとってみますと、若い人も中堅も年配の人もみんな発言するのですが、妙にバランスの良いことに驚きました。年配の職員が若い我々や中堅の人たちの発言を支持するのです。みんなを応援する雰囲気がとても居心地がよく、私にとってははじめての会議の体験でしたが、会議というのはこういうふうに進めるのか、ということを教えてもらった感じでした。

平野:大泉高校で、職場集団をそういう形で体験できたわけですね。

倉林:年配の職員が重要な役割を果たしていると思いました。私たち若い連中がいちいち肯けるようなしっかりした発言をして年寄りの我儘を見せつけるようなことはありませんでした。もちろん、中には勝手な人もいないわけではありませんでしたが、むしろそれだからしっかりした発言がイニシアティブを握れたのだと思います。

(2)「そういうんでいいんですか、先生」

平野:ご自分ではどんな教師像を描いていたのですか。

倉林:教師になろうと思ってずっと来たのですが、教員としては何も分かっていない時期で、特に弱いところは生徒の集団をどうやって育てていくかという感覚を全然持っていなかったところだろうと思います。

平野:そのあたりは高校時代の自分自身の集団体験や体験とクラスメートと年齢

差があったことに関わってきますよね。

倉林:そうですね。ある生徒から、ガツーンといわれたことがあるのです。2年目で普通科の担任を持った時のことです。4月、始まったばかりでロングホームルームをやることになりました。学級委員が来て「先生、今日はなにをするんですか?」と聞いたので、「自由にしていよいよ」と答えたんです。「そういうんでいいんですか、先生」と言われました。(笑)

「本を読みたい人は読めばいいし…」「そういうんですか、LHRというのは!」とほとんど抗議をうけていました。そのときはむきになって「イイんだよ、それで!」といいましたが、(大笑)

平野:意地を張ったんですね。

倉林:内心では、こういうのじゃまずいんだろうなと思いましたね。この子は凄いい子だと思いながら意地張っていました。冷や汗をかきながら、初めて生徒に教わったと思いましたね。それから本を読んで勉強しました。

平野:LHRの時間が来ることはわかっていたのですよね。

倉林:自由にすれば生徒は喜ぶに違いない、と思っていたのです。学級委員のほうがよく自治活動や集団で何かをするという意識を持っていたのです。優秀な子だったのです。後でのことですが、「あの子と結婚できたらいいなァ」と冗談に言ったら、それが噂になってしまっって(爆笑) …、

平野:どこでそんなことを言ったのですか。

倉林:当時、私に関心を持ってくれるのは、

年配の女性職員くらいのものでした。家庭科の先生が3人いたのですが、3人が別々に「先生、お昼食べに来ない？」と私に声をかけてくれるのです。(笑)グチの聞き役ですね。手紙を貰ったこともありましたが。私が25、6歳、彼女たちは50代の方々でしたが…(爆笑)。被服・調理・保育と3人いたのです。普通科とはいっても農業高校の中の普通科でしたから、家庭科がいっぱいあったのでしょね。

「先生は将来どんな人と結婚したい？」などと聞かれたものですか、さっきのように答えたんです。すると、一時、生徒の間でもワーワーキャーキャーとなったのです。別に意図したわけではないのですが、また別のところで「アパートの窓のところに女性の下着が干してあるのっていいな」と軽口を叩いたら、それが間違えて伝えられてしまって、倉林さんのアパートの窓には女性の下着が干してあるということにされてしまい(大笑)、女生徒がドン引きしたことがありました。内心ホッとしたことはしたのですが。

平野:今日は沢山の学級通信のコピーをいただきましたが、大泉高校から始められたのですか。

倉林:通信は次の松井田高校へ行って始めました。大泉高校では「学級日誌」が熱心に取り組みられていましたね。

平野:それは学校全体で取り組まれていたのですか。

倉林:学校の日誌とは違って、みんなで自由に書けるように、わら半紙一枚を一日

分として記述する欄を大きくとって作った独自の学級日誌です。生徒が書くと私も赤ペンでコメントを入れてやり取りをするのですが、それが盛り上がりだしてどんどん厚くなって、1年も経つと7、8cmくらいになってしまって…、それで、分けようと思ったら分けられないほうが良いというのです。厚みのあるほうが良いというのです。持って帰るのは大変だが、目立っていいというのです。そのとき、生徒は書きたがっているのだということを感じました。

平野:盛り上がるきっかけはなんだったのですか。

倉林:よく覚えていないというか、余り意識したことはありません。やっているうちにそうなったと思っています。初めから生徒が書きたがっているとは思っていませんでしたから。生徒と私のやり取りについて次の生徒が書き、またそれについて私がコメントするので次の子がまた書くというつながりが面白かったんですかね。話があちこちしながら続きましたね。

平野:自由に書けるスペースがあったから、自由にコミュニケーションを始めたという感じですかね。

倉林:それで、彼女たちが卒業するときには、ちょっと大変だったのですが、3年分の学級日誌を学校で使う黒い表紙をつけた手製の本にして記念にみんなにあげました。あとで同窓会に呼ばれたときに実物を持っていきましたらみんなに懐か

しいと大喜びされました。この経験は私にとって貴重なものでした。もう一度担任したときも同じような本を作り、みんなに配りました。

平野:それは例のLHR体験があったから、ということでしょうか。

倉林:そうだったと思います。それから、これは組合活動の一環なのですが、邑楽支部に



は守随さんという高校生運動の親玉みたいな人がいて(笑)、その活動に参加したことがありました。群馬県にはサマーキャンプという有名な活動がありましたが、私のとき(74年)はそれがなくなっていました。その後、守随さんたちは東毛で足利の高校生たちを含めて一緒に活動しており、大泉高校の生徒を誘って泊りがけで参加したことがあります。そういう中で、大泉高校の生徒たちも自治活動の力をつけていき、学校の中に生徒会活動とは別に生徒だけの活動をする独自の組織を立ち上げるまでになりました。私が中心だったのではなく、1年後に入ってきた斎藤さんが主要な役割をしていました。彼は自分自身が高校時代にそういう自主活動の経験を持っていました。

平野:そういう経験をした高校生が教員として活動する時代だったのですね。

倉林:それから、彼は生徒だけでなく、職員たちにも同人誌を作ろうと呼びかけて、みんなから原稿を集め、本を作って発行

するなんていうこともしていました。

私は山岳部の顧問をしていたので、その様子を書いたことを覚えていています。

平野:山の経験はあったのですか。

倉林:いいえ、大学時代に一人で丹沢に行ったり、家に帰るときに秩父を越えて帰ったりとかはしていましたが、山登りはしていません。山歩きですかね。

平野:そういう意味では、大泉時代は青春していたという感じですかね。

倉林:そうですね。大学時代は、勉強はしなかったのですが、非常に解放された気分で過ごすことができました。その延長で、若い職員がたくさんいましたから、楽しく過ごしたという感じですね。

3.グッドカンパニー—松井田高校時代—

(1)先生に「またやられた！」

平野:‘81年、結婚を機に松井田高校へ

転勤なされたのですね。

倉林:そうです。大泉に7年いて、担任を2回やって、松井田には自分なりに意気込みを持って行きました。

平野:どういう意気込みですか。

倉林:生徒たちが楽しい高校生活を送れるいい学校を作ろうという気持ですかね。当時の松井田高校は、組合員を中心に学級通信を沢山出しているので有名な学校でした。

「回る輪転機」という冊子が出るくらいみんなが学級通信を作っていました。そういう学校へ行けることにワクワクしていましたね。そのときは80年度末の大異動で、あんな小さな学校で16人が異動させられたのです。3分1以上が配置換えされたのですから、異常といえは異常な人事でした。私が信頼していた先生方が何人も出されていました。私と一緒に着任したのが中束作蔵さんや亡くなった佐藤毅さんでした。

平野:その大異動の背景には何かあったのですか。

倉林:人心を一新するとかいう県教委の方針なのです。この年からどんどん進められました。私と一緒に校長が着任したのですが、この校長が反動的な校長で、職員会議で職員の意向を尊重しない人でした。私は自分が育てられた先輩教師の役割を松井田で果たさなければと思っていましたので、校長と対立するなどいつも「怒れる教師」でした。

松井田高校は所謂周辺校の一つで、高

崎地域の高校にいけない地元の生徒と高崎からの流入組の混じった大変な高校でした。もちろん、地域の優秀な生徒も少なくなかったのですが。でも、エネルギーに満ちていて、いい意味でも教師にぶつかってこられる生徒たちが多かったように思います。

平野:その子たちのエネルギーってなんだったんですか。

倉林:何なんでしょう。この頃の高校生はどこでもそうだったのかもしれませんが、元気があって先生に文句を言えたんです。それを良い意味の「エネルギー」と評価できました。ここでも学級日誌を作りましたが、大泉と同じで、厚いのがいいと高崎から来ている子たちはそれをわざわざ見えるように抱えて、自慢しながら信越線で通学していました(笑)。他所のクラスの子が「いいな、いいな」といってくれるのが嬉しかったようです。生徒たちの書く気持が同じように強かったのでしょうかね。

「回る輪転機」というのは生徒が書くことに意味がある通信でしたが、私の出す通信「グッドカンパニー」は私自身が書くものでした。学級日誌は生徒の書くもの、通信は生徒の意見や作品を載せる場ではあったのですが、私を書きました。生徒に書かないかということまでいけなかったのが心残りになりましたが、これは私自身の限界でもあるのです。

「グッドカンパニー」にも書かれているのですが、松井田には手作りの予餞会

があります。そこで劇をやろうと提案したのですが、みんな嫌がりました。「先生が脚本を書いて、先生も出るから」と説得してやりました。凄く好評で、いっぱい拍手を貰いましたから、生徒はさぞかし満足したろうなと思ったのですが、感想文を募集したら「また、先生がやってしまった」（爆笑）と書かれてしまいました。三年生のときの感想文なのですがね。一度目の文化祭のときは「先生方の似顔絵を描こう」と提案して実施しました。二年後の2度目には卒業生の切り絵画家関口コオさんから許可を貰い、みんなで部分部分を分担し大きな絵にして発表し、関口さんからは「嬉しい」と喜んでもらったのですが、生徒たちは「先生に言われてやらされたような気がする」という反応だったですね。どうも、みんなで納得して自分たちでやるという雰囲気作りが出来てなかったようです。三年生のときは「桃太郎」と「竹取物語」をごちゃ混ぜにした劇「桃太郎」をやり、最後にお姫様が舞台からパーと消えて、直後にギャラリーをライトが照らすとギャラリーからファーと人が走っていくという演出をした。みんながびっくりして「ウォーッ」という歓声上がり拍手喝采だったのですが、「またやられた」(笑)。どうも私が待てないで先にいっちゃった。「オイ、後からついて来い」みたいになっていたようです。表面的にはみんなの意見が取り入れられたように見えるんだけど、内実は生徒にストンと落ちて

「いちのにぐっどかんぱに」

“保護者の声” ‘88.1.11 より

Kさん：先生、ウチの子は小さいバッグ一つもって学校へ行くもんですから『お前、それじゃ勉強道具なんか入らないだろう』って聞いたんですよ。そしたら、『学校にみんな置いてあるから心配すんなよ、かあちゃん』って言うんですよー先生あれでいいんですかねー。

[いいわけありません]

Zさん：「どーしてこんなになっちゃうんでしょうかねー。小さい頃はほんとうにおとなしくて親に反抗することなんか絶対になかったんですよー。それが今はあれですからねー。本当に…恐ろしいですよ。先生も大変でしょう」「はい」

いないものがあることを感じながら過ごした松井田時代でした。

(2)「強い指導」の誘惑

平野：松井田では病気が再発したとか…

倉林：行ってすぐ二年の担任を持ち、教室へ行ったら生徒が足を机に上げて待っていてくれました。意気込んで行きましたから、お前らには負けないぞと大きな声を出して話をしました。しかし、疲れが溜まったのでしょうか、翌年の1月になると一日に500gずつ体重が減っていくのです。また、気管支炎の再発でした。共働きの子育て中でもあったのでラクができなかったのですが、入院しました。三年間休職、年配の副担任の先生に後を引き継ぎました。「卒業までには退院してくれらあね」「進路の内申書は書けないよ」などといわれたのですが、結局全部お任せすることになってしまいました。抗生物質を2週間点滴するとスウッと炎

症が引くのですが、止めると2、3日でまた戻ってしまうというのを繰り返していました。本当に大変な時期で、もう戻れないかなという不安がありました。

平野:戻れるきっかけは？

倉林:もうこれ以上休めないという、2年半くらいたったときに、ものすごく熱が出たのです。40度以上の熱が2週間下がりませんでした。あと3ヶ月で休職期間が無くなります。ほとんど絶望的だったのですが、医師に勧められた内服薬、これは一世代前の薬でしたが、を飲んだら劇的に効いたのです。主治医から高熱で今までの菌が御し易い菌に変わったのではないかという説明を受けました。その代わりに体中に炎症が出来てそれを直すのにまた大変でした。炎症を起こしている菌に対しては熱は効果的だったようです。これ以後、点滴でなくて内服薬で持ちこたえられるようになって、医者3月には戻れるよと太鼓判を押してくれました。しかし、校長には信じてもらえませんでした。「倉林さん、もうすぐ期限が来るからといって無理して出てきてだいじょうぶかい？戻ってまた休むといわれたら困るんだよ」(大笑)とあけすけに言っていました。私自身、心配はありましたが、結果的にはだましまし、何とか持ちこたえることが出来ました。

平野:大病はここまでですか。先ほどの予餞会の話は病気休職の後の話なのですね。

倉林:そうです。最初の一年目は勢い込んでいましたから、体罰を愛の鞭と錯覚し

て指導したこともありましたが、一部の生徒には理解されたようですが、反発する生徒もいましたね。中には、私が信頼関係を築けたと思っていた生徒が突然「オラァ、先生なんかでっえ嫌いだ」といつてきたこともありましたが。これを機に、力づくの指導は結局は信頼関係を崩すだけと思うようになっていきました。でも、私の強い指導を見て「倉林先生のような人がいなければここは納まんないよ」と言って、自陣営に引き入れようとする強い指導肯定勢力もあって、彼らの意見に納得する部分もあったものですから正直迷うこともありましたが。それが、休んでいる間に、基本的には信頼しあわなければ何も出来ないだろうと強く思うようになりました。

平野:離れていた3年間のうちに心境の変化みたいなものがあったのですね。

倉林:そういう意味では病気も悪いものではありませんね。(笑)少なくとも、考える時間にはなりましたね。

4.デリシャスカンパニー—高市女時代—

(1)男女共学のはずが…

平野:しかし、先ほどの予餞会に関する生徒の「先生にさせられてしまった」感想のように、いろいろ試行錯誤した松井田時代ということになりますかね。

で、いよいよ高市女に移ることになるのですが、このときのきっかけは…

倉林:10年経ったからというのが一番で

すかね。私は3年病休ですから実質7年ですが、県教委は10年とカウントしますから、10年経ったから機械的に異動ということになりました。希望は勿論なかったのですが、箕郷に住んでいますので一番近いのは高崎北高、ついで高市女だったのでそこに決まりました。県立から市立への異動でしたので退職届を書いて移りました。

平野:丁度移ったときが高市女の共学化問題が出ていた時期だったのですね。

倉林:職員会議には時々報告はありました。市女の職員や市教委の職員からなる振興整備委員会があって学校改革の検討を進めていました。私が行って2年間くらいは劇的な改革をする様子は見えず、後で問題になる高崎経済大学の附属高校にする構想などはなかったようでした。

平野:高市女を共学化するというものだったのですね。

倉林:そうです。共学化はやむなしという感じで、起草委員会の改革案が作られたのが2年目(93年3月段階)だったわけです。ところが、その年の4月に校長から「振興整備委員会の新提案」があったのですが、何か、校長室が二つ出来るらしいとかどうも要領の得ない説明でした。そして、だんだん見えてきたのが、高市女を3年後には廃校して新しい学校を作るというプランでした。

平野:改革案が廃校案にすりかえられたのですね。

倉林:大変なことになったわけです。私は「デリシャスカンパニー」という学級通信を発行し、生徒の生の声を掲載することに心がけていましたが、6月頃から学級通信の機能は残しつつ、高市女問題を生徒や保護者に伝えるための情報誌にせざるを得なくなっていました。生徒からはどうなっているか聞かれるし、同学年の先生たちからも「どういうふうに話せばいいんですか…」と尋ねられるし、保護者にはきちんと伝えられていない状況

はやいっつ！はやすぎるっつ！もう一学期が終わるなんて信じられない、私は。某授業中なんか「時間がたつのおそいなあ…」とか思ったりしたことあったんですが。あはは。やっぱ毎日がチョー楽しいからでしょうね。うしし。こんな私でも最初はちよつと心配だったもんね。「うまくやっついていけるかなあ…」とか。ふっふっふ。でも、もうバツチリへっちゃら。かっかっか。これからもみなさんよろしくね。うふつと。

中島「r a t y a n g」明子でした。おえー！

「D e l i c i o u s C o m p a n y」1993年7・16

だったのです。そこで、情報紙の役割を果たさなければならないと思って出し続けました。

平野:生徒からも疑問がどんどん出てきていますね。

倉林:ええ、一番ショックだったのは、職員会議での発言にもあったのですが、「こんなことで生徒が自殺でもしたらどうするんだ。私達の責任を果たせないぞ！」という声でした。

ある生徒が思いつめたような顔をして「先生！学校を止めるにはどうすればいいんですか」と私のところへ聞きにきたことがあります。バスケット部の生徒でした。当時高市女のバスケ部は県下一・二を争うチームでしたから、そのために来ていた生徒もいたのです。突然廃校になるというのですから、彼女にとっては後輩が入ってこなくなるだろうし、困ってしまったわけで、高市女にいる意味がなくなったと考えたのでしょう。

平野:彼女にとってはバスケ部の活動自身の持つ意味は重いでしょうからね。部活を続けられるかどうかは深刻な問題ですよ。

倉林:最初は何事かと思ったのですが、話を聞いていると、この問題は今の時点だけでも彼女の気持を傷つけていることを実感しましたね。酷いことを我々はしているんだと思いました。

平野:そういう中で事態がどのように推移して行くのかを具体的にお話願えますか。

倉林:6月17日に授業ボイコット事件がありました。ある一年生のクラス(私のクラスではない)が教室に鍵をかけ、教師を教室に入れなくしてしまった事件です。担任が行っても開けないし、生徒指導主

事が行って「そんなことをしているとお前たち謹慎だぞ」と脅しても開けませんでした。「倉林さん、行ってくれ」というので、生徒たちと話をしました。生徒の言い分は「校長先生は署名活動をしてはいけないといったけど、何もしないとこのまま進んでしまい、後輩が入ってこなくなる。だから、みんなで署名するために鍵をかけたんです」ということでした。その頃は、校長も一部の教員も市教委も「署名活動はNO」という立場を生徒に押し付けていたのです。生徒は生徒で何かしないと不安でしょうがないし、彼女たちの言い分を誰も聞いてくれない苛立ちがあったのです。

翌18日6時間目に体育館で学年集会が開かれました。前半は校長から説明が行われ、質問に立った生徒は40名以上、2時間を越える集会になりました。この結果、校長からは「犠牲は最小限にとどめる努力をする。署名は実施してよい」という回答があり、生徒たちの署名は生徒会の役員の手で、この日のうちに網中教育長に手渡されたのです。

P T Aも保護者に署名を訴えました。19日土曜日の帰りに生徒に署名用紙を渡して、月曜日にもって来たのですが、3万5千筆に及んでいました。たった一日か二日でこれだけの反対署名が集まったのです。保護者の大変だという思いがよく分かる数字ですね。ですから、生徒も保護者も一体という感じでした。そして、月曜日に父母が市役所に行き、助役と教

育長を訪ね、その署名簿を提出し、「希望をもって入学した生徒を切り捨てないで」と訴えました。でも、保護者達が傍聴したこの日の午後の市議会で高市女廃校案は可決されてしまいました。

私は生徒会顧問で生徒会活動を指導する立場でした。生徒会役員の生徒たちは良い子たちなのですが、生徒会として何をすべきはまだ見えないでいました。特に生徒会長は良い子だけに板挟みになって何をすべきかに悩んでいましたね。私が「考えようよ」というと「私だって考えてますよ」と尖った答えが返ってくる始末。「考えているだけでみんなの信任に答えられるだろうか」と問うてみるとそれでまた落ち込んでしまう。私自身がこれからどういう展開を見せるか分からないだけに、指導するのは難しいと思いました。

そういう悩みを抱えながらも、生徒会とPTAと我々職員がバラバラにならずに最後まで一体感を持っていたのが救いで、それが力になったと思います。特に組合員がほとんどだった職員集団ではPTAと同一步調をとることが確認されていたので、そういうことが可能となったのです。

平野:ちなみに、そのつなぎ目はどういうところが果たしていたのですか。

倉林:PTAの仕事は松本さんを中心に若い先生方が通信をつくったり、会議を設定するなど地道に活動していました。実務は大変だったと思うのですが、それ

が信頼関係を築く役割をしていたと思います。実際、保護者の意見は千差万別、いろんな意見があり、まとまるか心配なほどでした。高市女は絶対残すべきという主張があったり、国会議員とのつながりに頼ろうとしたり、外部の力に頼ろうという意見もあって揉めたのですが、最終的には保護者の気持をまとめ上げ、高崎市教委や県教委に訴えていくスタンスは崩れませんでした。これは大きな力で市教委や県教委にアピールしたと思っています。

平野:最初から教員組織の側もそういう方針をもっていたのですか。

倉林:現実的には、市議会で高市女の廃校条例が出来た時点で元に戻すのが不可能でしたから、現実的にどのように対応するかというときに、在校生全員を新しい高校に移行させることを目標にして、新しい高校設置反対にはもっていかない方針を立てました。

平野:改革案から廃止案に変わったという事は、その背景の一つに組合潰しのネライが予想されますよね。とすれば、闘いの目標とか闘い方にはいろいろな選択肢があったろうと思いますが…。

倉林:いろいろな選択肢を考える余裕が与えられなかったというのが真実だったと思います。確かに分会会議でもいろいろ意見が出て初めから一枚岩というわけではありませんでした。当時、県内には伊勢崎と前橋に市立高校があって、それぞれで学校改革の時期を迎えていました。

前橋、伊勢崎はいずれも男女共学化の方向で改革が進んでいきましたが、高崎では高市女廃校・附属高新設案が、我々が意見を闘わせる余裕もないまま突然出てきて結果的には止めることができなかつたのです。ですから、弁解になつてしまふかもしれませんが、現実的には新しい高校を認めざるを得なかつた。

平野:意思統一の過程でまとまり難かつたとか紆余曲折があつたとか…。

倉林:分会段階ではあくまで撤回を求めるといふような過激な意見はなかつたです。目の前にいる生徒にどうやって楽しい学校生活を保障するかが我々の方向性で、そこは揺るがなかつたです。犠牲者が出る心配もあるわけです。その点は一一致して運動しようとしていました。穏健な組合員の一人が「大変な事態だ。自殺者がでたらどうするんだ」と声を震わせながら発言したのが印象的でしたし、私自身生徒から退学の方法まで聞かれているわけで、現実的な対応が求められたわけですから。

(2)雨の中のデモ行進

平野:フロアからも様々な発言をいただくこととなりますが、その前に、経緯の最後まで伺っておきたいと思ひます。

倉林:二学期は膠着状態が続きました。市教委側はあくまで二つの学校案、高市女は廃校、在校生は後輩がいないまま高校生活を終了する案にこだわりました。新しい学校は全く別のレベルの高い高校と

いふ方針は変えないで乗り切ろうとしていました。しかし、生徒やPTAや職員との抵抗が大きかつたので、高市女敷地内での新しい高校の開校は諦め、高経大の敷地に2億円かけてプレハブ校舎を作り開校する案を発表しました。しかし、この案は県教委が生徒の教育環境としては好ましくないとして認可しませんでした。その後の案が出ないまま、PTAは生徒全員の移行を認めろという運動を進めました。返事がないまま、二学期が終わりました。しかし、運動自身は下火にならずに続けられ、生徒はデモ行進をしたりして全員転学を求め続けました。…

平野:どこでしたのですか？

倉林:雨の中を市役所までデモをしました。

平野:生徒会が呼びかけてやつたのですか。

倉林:そうです。この頃になると生徒会が力をつけてきていまして、生徒会チーフの大山さんに内緒で市長に会いに行つたのです。「どうして相談しなかつた？」と聞きますと、「先生に言えば心配するから」「ダメだつて言うから」「先生方に迷惑がかかるといけないから」自分たちだけで判断していったというのです。市役所で「あなた方は高校生だから署名運動をしてはいけないといわれた」なんてことは報告するのです。私たちはその後市役所に行って、生徒会役員に対応した秘書課長に会つて、高校生が署名をしてはいけない、とか効力がないといった

ことが間違いだと指摘しました。全体としては生徒と保護者、教員が一体となって運動が展開されて行きました。

このように、生徒会の役員自身が自分で考えて、自分で行動する部分がどんどん増えていき、それが市民の目にとまり、県教委の知るところとなり、県教委は高校生の教育環境としては問題のある事態が起こっているという認識を深めて行きました。

暮れになって、県教委は今の状態は憂慮すべき状態で、新しい高校を認可できないという意見をチラホラ出し始めます。

マスコミも、上毛新聞や毎日新聞は高市女生徒・保護者の立場を理解した報道姿勢をとるようになって来ました。一方では、上毛新聞に“ひろば”という投稿欄がありますが、賛否両論の投稿が掲載されるようになっていました。特に、T君という高校生が「高市女学生はワガママだ」「自分たちの意見が通らないからといってデモをされては市民が迷惑だ」といってもろに批判して来ました。

また、渋川消印で生徒会長宛にハガキが来ました。内容が凄いので、紹介してみます。

経大附属高校は、近く「高高」や「高女」以上の高学力の名門校になるのがあります。従いまして「市女」の生徒がそのまま転学などというのは公平ではありません。あなた方は多くの高校の中から「市女」を選択し、「市女」を受験し、「市

女」に入学したのだから、当然「市女」の卒業生になるべきです。「経大の附属になる予定だから市女を選んだ」などというのは屁理屈というものです。「高女」を「選択」したのではなく、「市女」しか入れなかったという方々が多いことは群馬県民の多くが知っているのです。無理にゴネてデモまでやらされて転学したら新入生より学力の低い在校生となってしまう、国民の笑いものです。渋々イヤイヤながら「転学を認める」と附属高校や市会が認めても、良識をもって辞退すべきです。市女生には市女の同窓生として生きることがふさわしい。

と書いてありました。生徒の心は少なからず傷つくかもしれないけれども、こういう意見には道理がないことを分かってもらいたいと思って1月28日のNo.69にそのまま掲載しました。

(3)理想的な学校って差別するの？

倉林:年が明けて渋々ですが、附属校の校長が全員の転学という方針を出しました。しかし、その後もいろいろありまして、全員転学というけれど自分の意志で転学を表明しなさいとか誰かにそそのかされて決意しないようにとか、そういう文面の書類を渡したり、本人の意思を確かめたいと面接まですることになりました。こういう嫌がらせのようなことが次々と起こりました。

94年1月29日に新しい校長上岡先生

が説明に来ました。彼は高経大の教授で、心理学・教育心理学を教えています。

概略次のような話をしました。

新しい高校はみなさんとは違ったカリキュラムで実施(1年生は学年制、2年生からは単位制、半分以上は選択科目。HRは解体され、ゼミナール形式)するので、本当は来られないのだけれども、みなさん用のカリキュラムも作ります。

新しい学校は生徒の自由意志を尊重する。附属校のスローガンは自主自立、自学自習、ourselves(自分自身で)を尊重し、みなさんを子ども扱いしない。生徒指導の基礎として「～してはいけない」「～するな」という、制限的、禁止的校則は作らない。各自が自分のあるべき姿をえがく。つまり、自分で自分の校則を作ってもらいます。ちょんまげ・辮髪でも十二単でもかまわない。それが自分の校則にあっていればなんでもいい。しかし、自学自習できない人は卒業できないから転学しない方がよい。

そんなことを言うわけです。すごく良い学校なので、本当はみなさんには来てもらいたくないのだがということを言外におおす話をするのです。

生徒からは次のような質問が出ました。

- ①転学願いを出せば生徒の意思は確認できるのに、更に面接するのは生徒を信用していないのですか。
- ②市女の先生と一緒に附属高校へいけるのですか。
- ③生徒会はどうなりますか。

④転学生の制服はどうなりますか。

⑤まだ未定ということがたくさんあって不安。ちゃんと教えてください。

⑥(制服問題・先生の処遇問題など)分からないことがあるのに転学の決断をしろといわれても出来ない。

いちいちが気分を悪くさせるような問題が年が明けても続きます。最終的には我々が説得した部分もあったのですが、私のクラスの一人の生徒は最後まで「行きたくありません」と言い続けていました。そういう生徒にも決してきつい口調でせまることはしませんでした。しかし、最後は全員が「転学願い」を出して転学することになり、生徒については決着しました。

「ひろば」2月2日に次のような嬉しい投稿がのりました。

心の傷をいやすのは一

原田文夫

高市女のみなさんに明るいニュースが生まれ、本当によかったと思います。

忘れもしません。昨年十一月二十日、雨の日の「在校生全員の附属高校への移行」を訴えて、デモ行進をしました。私は、あなた方のデモ行進参加を、勧めようとは思いません。しかし、あなたたちを、ここまで追い込んだのは、誰なのか怒りを覚えます。

「高市女生は受け入れない」などといわれると、悲しくて授業も頭に入らなかったでしょう。「三学年そろって勉強し

たいのです」と、生徒会長は悲しみをこらえて訴えました。私は、このようなごく当たり前の生徒の願いを、なぜもっと早く理解してやれなかったのか、残念でたまりません。ようやく生徒のことを第一に考え、差別され、切り捨てられようと危惧する生徒の気持ちを和らげるための処置に対し感謝したい気持ちです。それにしてもこの半年間、高市女の皆さんの受けた苦悩、不安、悲しみ、そして憤りは、どんなものだったのでしょうか。この生徒たちの受けた大きな心の傷をいやすために、当局はどのような方法を考えておられるのでしょうか。（富岡市＝無職・61）

何の利害関係を持たない一般市民の公平な目、意見に生徒と一緒に感謝しました。

また、匿名でしたが、渋川のおばさんを名乗る人から生徒会宛にこんな手紙が来ました。

…本当にご苦労なさいましたね。…世間でいうところの「進学校」をつくるのだから今の高市女の生徒は受け入れられない、ということを差別と感じられた皆さんの感性の高さに新鮮な感動を覚えたのです。差別は「差別をする側」の人たちには感じられないものですから、「差別された側」の人達が声を上げない限り、解消しないわけです。みなさんの勇気と実行力に拍手を送ります。…全員の転学が実現しさえすれば問題が解決し

たかのような錯覚も持っていましたが、考えてみれば、これだけの生徒の気持ちを傷つけ、PTAの方々にも多大な迷惑をかけて、誰も何の責任を取らないなんて、おかしいことですね。…偏差値などでは測ることのできない人間としての賢さを、みなさんはしっかり持っていらっしゃるのです。私はそれを教えられたと思います。それから、私が言うのもおかしいのですが、新一年生を暖かく迎えてくださいね。…（長文なので…の部分は省略させていただきました。）

この嬉しい手紙を読んで、生徒会本部役員たちは泣きました。そして、2月8日付け「ひろば」に生徒会長の飯塚さんがお礼の言葉を書きました。

励ましの手紙に感謝

飯塚 絵美

私は高市女の生徒会長です。先日、私たちに励ましのお手紙をくださった人に、ひとことお礼を言わせてもらいます。

本誌でも昨年来、さまざまな議論が展開されてきました。そのこと自体は私たちにとってとても勉強になりました。でも、正直のところ、これまでに随分と心を傷つけられてきました。本当に悲しい手紙が届いたこともあります。しかも、こういう人はきまって匿名なので、反論のしようもないのでした。転学の方が見えてきたは言え、何か割り切れない気持ちで過ごしています。こんなとき、いた

だいた手紙は本当にうれしかった。みんな泣きました。二日の本欄でも、富岡の人の投稿を読んだときもそうでしたが、私達の気持ちを分かってくれる大人がいると、本当に安心します。私たちは新入生に対して何のわだかまりもありません。新しい学校を楽しく勉強できる場所にするために、一緒に考えたいと思っています。人を信頼することを教えてくれた皆さんに感謝します。

(高崎市＝高市女生徒会長・17)

一方、もしかしたらネライは教員だったかもしれないということがだんだん明らかになっていきます。組合員の中で、そのまま新しい学校へ行けない教員が出たのです。6人の先生が市教委や図書館・公民館・適用指導教室などに配属され、6人の先生が退職願を出して県立高校へ異動しました。

平野:同窓会はつながっているのですか。

松本さん:つながっているのだと思いますよ。でも、あのとき(飯塚生徒会長)の第二学年は入っていません。

平野:ある意味、一番微妙な学年が入らなかったのですね。

(4)「間違いを間違いだといえる人間に」

倉林:厳しい時期の中で、私が特に感動したのは2月10日に実施された予餞会が素晴しかったことです。みなさんも口々にそういいます。市女の予餞会の凄いところは何かから何まで生徒の手づくりである

というところでしょうか。参加団体も自主的に名乗り出る。強制はない。演目の決定、内容も全て生徒の手になる。演劇部は一年生が脚本を書き『今よりずっと昔、別の世界で起こった出来事』を熱演しました。ファンタジーでした。

高崎音楽センターで、非常に素晴らしい音響設備や証明設備を使って毎年やるのですが、生徒も素晴らしいし、教員が最後にみんな出てきて歌を歌ったりするのですが、そういう様子を見て生徒が感動するのです。いろいろな嫌な思いをして転学して、よい方向には向かっているとはいえ、傷ついた部分も多かったですから、私のクラスの女の子が「デリカ」に投稿してくれました。「三年生の先生方による『乾杯』は圧巻中の圧巻。思わず涙を流して泣いている自分に驚いてしまった。三年生の先生方の『ひとこと』を聞いたとき、それに聞き入る会場を見渡したとき、『市女はこんなにいい学校なんだ』と改めて実感した。ステージと観客が一つになっていた。心から『この学校の生徒で良かった』と思えた。(心底からそう思えたのはこの日が初めて)と、同時に、『廃校なんてヤダ』と思った。来年も、再来年も、これからもずっと予餞会を、こういう素晴らしい伝統を残しておきたい。」と書きました。演じる生徒もみる生徒も本当の表現する力があって、改めて廃校になるような学校ではないなということが確認できました。

市の改革の方針のもとになるのが、高

市女は悪い学校になったからというのです。その根拠になったのが92年度入学生が一度だけ定員割れしたことでした。そのことを大きく取り上げて、生徒が悪くなったから定員割れしたのだと宣伝しました。それだけでも生徒たちは傷つくのですが、教育関係機関の市教委は平気でそういう配慮のないことをするのです。

当時は1学年9クラス的女子高ですし、少子化が進行していましたから、そんなに深刻な問題だとは捉えていませんでした。そういう攻撃をされていましたが、その二年生たちが中心となって予餞会を実施し、そういう非難される高校生ではないということを見事に実証して見せたのです。

私は、長文なのですが、是非卒業式の答辞と送辞を読んでいただきたいと思います。送辞は生徒会長が読んだのですが、圧巻だったのは卒業生に対して「間違いを間違いといえる大人になってください」と呼びかけたところです。

三年生のみなさん、ご卒業おめでとうございます。在校生一同、心よりお祝い申し上げます。

目を閉じると、先輩方と共に過ごした日々が鮮明に思い出されます。知恵をしばり、長い間にわたり計画を立てて大成功を収めた菱華祭。あの花火の美しさがいまだに忘れられません。クラス全員が団結し、力を出し合った体育祭。先輩方のご指導を受けながら、毎日懸命に練習した部活動。

すべてまだ、つい昨日のことのようです。先輩方は私たち一・二年生の目標であり、よきアドバイザーでした。今までいろいろな面でご指導をして下さり、本当にありがとうございました。

今年度は、三年生の皆さんにとって、進学・就職とこれからの人生を選択していく上で、非常に大切な年であったにもかかわらず、高市女は大きな問題を抱えさせられてしまいました。昨年六月、私たちは突然、私たちと同じ校舎に、私たちとは全く別の新しい学校ができることを知らされました。しかも、それは、今の一年生が卒業すると同時に高市女は廃校になってしまうという、誰も考えもしなかった前代未聞の大問題でした。誰もがショックを受け、学校は大混乱に陥りました。『未来にはばたく学校』という入学案内の言葉に希望を持ち入学してきた一年生たちにとっても、高市女で全く普通の高校生活を三年間送ろうと思って入学してきた生徒にとっても、全く詐欺にあったように思われました。

私たち高校生にとって、「三学年そろったよい環境の中で学びたい」というのは当然の権利と思います。私たちは、勝手に子供の未来を踏みつぶす大人たちに負けるわけにはいきません。高市女生全員の移行を求めて、署名やデモ行進やビラまき等の運動をしました。このような時、三年生の皆さんの立場は非常に複雑なものがあったと思います。自分たちの母校がなくなってしまう。二校併設になったとしても、私たち在校生が全員移行になったとしても、高市女は廃

校になってしまうからです。先輩方にとっては、このうえなく辛く悲しいことにそういかなかったと思います。しかし、それにもかかわらず、先輩方は積極的に私たちの移行を求める運動に参加してくださいました。自分たちの気持を抑えて私たち後輩の未来を心配してくださいましたからだと思います。私たちは胸にこみ上げるものを感じながら運動を精一杯続けました。そして、全員の移行が認められました。これは、多くの市民の方々のあたたかいご理解によることは勿論ですが、何よりもPTAの方々、先生方、三年生を含む全生徒の気持が一つになったからこそだと心から思うのです。私たちは、この運動を通して、これからの人生を生きるうえでの大切な宝物をつかんだように思います。

私たちは全員移行が認められました。しかし、まだ私たちには不安でしかたないことがあります。それは、先生方がこれからどうなるのか分からないということです。先生方はいつも私たち生徒のことを一番に考えて下さり、私たちといっしょに悩み、一緒に考えて下さいました。長い間、お世話になった先生方と来年度は一緒に学べないかも知れないと思うと不安でなりません。それを考えると、まだ高市女問題は終わっていないのだと思います。私たちは来年度も先生方と一緒に高校生活を送りたいと願っています。この私たちの願いを実現するよう、是非先輩方もお力をお貸しください。

高市女は、明るく伸び伸びした生徒でいっぱいなの、どこの学校にも負けない、とても素晴らしい学校です。私たちの中には、経大

附属になるからと思って入学してきた人もいますが、今では皆この高市女が大好きです。こんなによい学校が廃校になるなんて悲しくてくやしくてしかたありません。高市女のよさをもっと伸ばしていく方法は他にもいくらでもあったはずですが。

先輩方は高市女の最後の卒業生です。高市女という名前はなくなってしまうかも知れませんが、間違いなく先輩方の母校はここです。私たち在校生も大好きな高市女の生徒であったことを誇りに思い続けていきます。先輩方も、これからはずっとほこりに思い忘れないで下さい。新しい生活の中で、たくさんの困難に出会うと思いますが、そんな時に高市女で過ごした日々を思い出して下さい。私たちはこれから新しい高校の生徒となり、高市女に負けないような素晴らしい学校を、私たちの手で創っていきます。高市女はなくなったりしません。名前は変わっても続いていきます。私たちは高市女のことをずっと忘れません。

卒業生の皆さん、生意気なことを言って申し訳ございませんが、卒業後も御自分の持っている個性を十分に活かし、そして、物事を正しく見極める力を持ち、間違いを間違いだと言える人間にきつとなって下さい。

最後に、卒業する皆様のご健康と、ますますの御活躍をお祈りし、送辞とさせていただきます。

平成六年三月一日

在校生代表 飯塚 絵美

出席していた市当局のお歴々は方針の

間違っていることを認めないまま「本当に素晴らしい学校になることを喜んでます」と言っただけでした。二校推進派の、というより、市議会議員として最初から高市女廃校を誰よりも推進していた同窓会長は、同窓会入会式の挨拶で「私は市長さんの『最大限努力する』という言葉に信じてみなさんの転学を願って来ました。表ばかりの運動だけが運動ではありません。みなさんの転学を私は水面下で運動してきました。…私のしてきたことは羞じることはありません。…」なんと白々しいことか。更に「困ったことがあったら何でも相談に来てください」とまでいったそうです。

三年生の生徒会長は「高市女で過ごした三年間に悔いはありませんが、今は、まだ市女生でいたい、そんな気持ち一杯です。高市女最後の卒業式ということで、より一層さびしさがこみ上げてきます。高市女は素晴らしい高校です。寛大で、伸びやかで、明るくて、私たちはこの学校が大好きです。…そして高市女は期待以上にすばらしい学校でした。」

彼女は廃校・転学問題を回顧する中で保護者や教師たち、市民の支援に感謝し、「皆さん、私たちは今、未来に向かって出発します。このように多くの方々に祝福されて私たちは幸せ者です。出来るものなら永遠にこのままでいたいのですが、とうとうお別れの時間が来てしまいました。さようなら」と結んでいます。

ちょっと立ち回りのあまり上手くなか

った校長がこの答辞を聞いているときにはソワソワして何度もポケットに手を突っ込んでいました。後で聞いたらハンカチを探すのだけれど入れるのを忘れてらしく涙がふけなかったとっていました。

私は記録係で、ビデオカメラを持って撮影していましたが、生徒も保護者もみんな泣いていて、私も写しながら泣けてしまうのでカメラが揺れるのを押さえるのに苦労しました。

大変感動的な卒業式でしたが、生徒たちがしっかり自分たちの意見が言える機会になりました。これを聞いていた某市議会議員が式後校長室に行って「あの送辞の原稿を出してください。誰かが指導したんでしょう。そうじゃなければ書けるわけがない」と。校長は「出した」と報告しました。この指導をしたのは学年主任の国語の先生でしたが、「確かに字句の間違いは指摘したよ。だけど中身についてはいっさい言ってないよ」といいまして、最終的にはその市議会議員も納得して問題ないと返してきました。大人が聞くと高校生がここまで書けるのか、こんなことまで言うのかと思うらしいのです。

平野:彼女たちのそれだけの経験をいたということなのでしょうね。

倉林:言えるだけのことを彼女たちがしてきたということだろうと思います。

生徒については以上ですが、6人の先生が県立高校へ6人が市の関係へ異動させるという問題が残りました。

5.民主主義が育て、民主主義が育った

平野:これに関する倉林先生の問題は次回伺うことにします。これからは質疑と補足発言をいただきたいと思います。



川崎さ

ん:この経過を聞いていて、1993年の「子どもの権利条約」の意見

表明権が今でもまだみなさんに知られていなかったり、いろんな意味で子どもたち自身にも育っていない感じがしているのですが、あの時代に生徒たちが意見を表明して闘いを行ったわけですよ。こういう闘いをどんどんやらないと子どもの中に意見表明権は育たないし、定着もしない。そういう意味で勇気ある素晴らしい闘いであったと思います。

倉林:その辺は生徒会のチーフだった大山さんが見えていますので、お願いします。

大山さん:子どもの権利条約とどうい



ふう結び付けるのかは分かりませんが、実際に目の前にこういう問題が起こらないと大人も子

どもも真の怒りをきちんと相手に言わなければ、次の打開策が見えてこないということではないかと思います。まさに12年前のことはその良い例だと思います。生徒会役員というのは行事係、縁の下の力持ち的存在ですから、派手な部分もありますが、あの闘いの1年間は彼女たちにとっては非常に濃い1年間だったでしょうね。もしかしたら一生に残る1年間といえると思います。倉林さんに考えているだけではダメだといわれても中々決断が下せなかったのが、事態の推移の中で自然に身体が動いていき、本質が見えてきたということではないかと思います。私自身、この1年間は同じように戸惑いながらもずっと来てしまい、最後に県立高校へ異動させられました。私はこうなることをある程度予測していたという大人のずるさみたいなことを否定し切れませんが、彼女たちは余りそういうところがないですから、自分たちの考えを素直にだし、行動していったのです。それにしても、学校文化とでも言うのでしょうか、学校の持っている様々な雰囲気・臭い、様々なものを含めて学校文化を考えたときに、学校を作ろうとする人はえらいと思うし、作りたい人は勝手に作ればいいとも思うのですが、既成の学校にずかずか入ってきて、いろいろな犠牲を強いて作り変える必要はあるのだろうかという疑問に思いますね。10年経って、振り返ってみて、(附属は)当初の目的とは違って、所謂世間並みの高校に戻っている感じがし

ています。あの改革案の理想主義はなんだったのか、改革案自体に無理があったと考えざるを得ません。

松本さん:同窓会の話が出たので付け加えますが、同窓会長というのは終始一貫して高市女廃校＝附属校作りで市議会の中心メンバーとしてリーダーシップとして活躍した人なのです。同窓会長自身が母校の高市女を廃校にするというのですから信じられないかもしれませんが。

転学問題が出たときに、同窓会有志が動いて係職員と一緒に署名運動に取り組んでくれました。夏休みにやったのですが、同窓生名簿で一万数千名いるのでしょうか、署名簿を発送し、8千筆くらい集まりました。同窓会長や幹部たちは勿論何もしなかったばかりでなく、高市女は廃校なのに、どういうわけか同窓会は附属校に継続されるとまことしやかに吹聴しているという噂がたちました。同窓会の幹部たちは酷いことをやっていたのです。

小川さん:秋葉原で凄い事件が起きました、私も子どもを持つ親として非常にショックを受けま



した。倉林先生の話と関連して特に思うことは、犯人の加藤青年が事件の背景として本人が語っていることによると、小学校時代は作文や絵は親が書いて教師から優秀な成績であるという評価を受けて、

中学校では親が指導しきれなくなったので成績は振るわなくなったが、青森高校へ入って成績が急降下して負組となって苦しんだという話です。そこから何を考えたかという、教育システムや教師は当てにならないかもしれないという非常な不安、親が書いたものくらい簡単に見破れるじゃないか、教師は何をやっているんだという心配です。全部の先生がそうだとは言いませんがね。もう一つは、「子どもの権利条約」に絡みますが、倉林先生の「また先生にやられちゃった」というお話がありましたが、子どもが自分で考えて自分で動いて、意見を述べて、それを大人がサポートしリードして高めていくが、あくまで主体は子どもであるというのが基本だと思います。たとえその子どもの発達、成長段階がどんなに幼いものであっても、それは本人の課題なんだから大人が本人の代わりをしてしまったらダメなわけですよ。ましてや高校生段階では教師がリーダーシップを取っては致命的なダメージを与えかねない。それが生徒の厳しい評価につながっているのだと思いました。

それから、3年間病休を取ったので気持ちも変わり、悟りも開けて(笑)生徒の側に立ち続ける決心がついたという話がありました。ある人がこんなことを言っています。大人になるとはものがちゃんと見えて、目に見えないもの、昔の人は見えないものを神様といったんだけ

ども、抽象的なものまで見えるようになることだといっています。こういう力はどうすれば身につくのかという質問に答えて、方法は三つあるというのです。一つは大病して死にそうになること。人間は死にそうになるとたいてい悟りを開く。もう一つは刑務所に入ること。刑務所で人間扱いされないからその経験からかなりクリアに物事が見えるようになるそうです。三つ目は倒産して夜逃げをすること。(笑) 社会的信用がゼロになって相手にされなくなると初めて社会の仕組みや人間の気持ちの裏表が見えてくるというのです。私はまさにそうだと思います。加藤君というのはそれにぶつかったわけですよ。それを両親を含めた周りの大人が彼の言いたいことを聞いてあげたのか。誰も聞いてやれないから孤独だ、不安だ、復讐だ、刺せと一直線にいった悲劇。これは非常に示唆的な事件だと思うのです。教育システムの常にもっている弱点というか無力さのようなものを感じます。だから、いろんな形でサポートする努力が大切だとつくづく感じました。

針谷さん:今、倉林さんの話を聞いていて、



焦点を教育改革に絞って発言をします。

群馬県の高校教育改革

というものを振り返ってみると、市立高校においては高崎市女の高経大附属問題、

前橋市立の場合は中等教育構想が男女共学という問題で収まり、伊勢崎の場合は中等教育学校「四葉学園」という形で進行しています。そういう中で、答辞の中で生徒の述べていることは非常に核心をついていると思います。高校教育改革を進める側の人たちの目標は、簡単に言えば大学進学率の高い学校を作りたいというところに収斂してしまうようです。ただ、現実にはそこで学ぶ生徒たちが言っていること、高市女の教育の中身、またその中での交友関係、諸活動の中で人間として成長していく姿は学校を統・廃合していこうとしている人たちの思惑とは全く違うところで進んでいることを示している。だから、いま、70弱の公立高校があつて、それぞれの先生たちが生徒たちと一緒に一つ一つの学校を作っていくときに、その理念なり何なりに大学進学とか資格取得とかのモノカルチャーを目指すのではなく、もっと豊かなものに思いを馳せる必要があるんじゃないか。高経大附高となって廃校にはならなかったが、実質的には高市女の築き上げてきた伝統はいまの高経大附高に引き継がれているようには思えない。あの時点では転学という形で収まったことを評価するにはやぶさかではないのですが、全体の高校教育改革を考える場合には現場で働いている先生方が自由闊達に議論しながら、生徒たちの意見をどのように入れていくのかというところのダイナミックな展望がないとダメではないかという思い

を禁じえません。今の高校教育は普通高校にあつては大学合格という一つの価値基準にしか光が当てられていないように見受けられますが、それをどのように切り崩していくのか、どうすれば切り開いていけるのかを当事者の生徒と保護者と教師が市民とともに考えていくことが大切ということを今日の話から再確認しました。

萩原さん:私は大山さんの言った学校文化に関して、高市女の持つ学校文化はどうであったかを問う必要があるのではないかと思います。倉林さ



んの「学級通信」を読むと、事実が事実としてきちんと語られている。このような学級通信は当時の高市女では特異な存在だったのかあるいは、事実が事実として書くのは当たり前だと認識されていたのでしょうか。大山さんが生徒会を、転学問題を自分たちの問題として捉えるよう指導されたことや清水さんが送辞の内容には触れずに字句の間違ひだけを指導するような姿勢を学校文化と呼べるかどうかは分かりませんが、事実を事実に基づき指導した。こういう学校文化をつくってきたわけですから、高市女で消えたとか高経大附属で消えたとかいう問題ではなくて、伏流して、必ずどこかで顔を

出すときが来るように思います。というのは、答辞も送辞もその持つ意味の新鮮さは今でも生きているし、訴える力を持っているし、人々を動かす力を持っている。また、そういう文化を遺すことのできた生徒と保護者と教師が共同して発揮した力はずっと生き続けると思うのです。

そういう意味で、倉林さんの出し続けた「デリシャスカンパニー」がどういう役割を果たしたのか伺いたと思います。

倉林:当初の私のネライは大泉や松井田で学んだことを生かしながら登場する生徒の思いが素直に表現でき、しかも「また先生にやられた」といわれないように、生徒が自分たちで判断して自分たちで動けるように育つことを目指して、彼らの意思をそっくり紙面に出せるような学級通信を、ということを考えながらやって来ました。しかし、次から次へ予期しないいろいろなことが起こったので、大山さんが言うように、生徒自身が自分たちの気持を表現したり自分たちで動かなければならない事態になったのです。そのときに、私は生徒は間違っていない、先生も同じ気持だし、だから、みんなに知らせたいし、保護者にも知ってもらいたいし、という知らせる役割を感じながら発行しようと思いました。世間の新聞とは違いますから、同時にクラスの生徒たちが何に感動し、何に悩みというようなこともお互いに交流しあえる役割も果たせるよう編集したつもりです。後半になるとだんだん忙しくなるので字も乱暴に

なってくるし、新聞記事を多用するようになり、十分に役割を發揮できないようにもなってくるのですが、基本的には生徒の姿が見えるようにしたいと思いました。そんなに過激だとは思わないのですが、ただこの時期に出し続けた人はそんなに多くはなかったと思います。ですからこの通信が他のクラスの先生にも利用されていたことはありました。

針谷さん:学校当局からこの通信に圧力がかかるようなことはなかったのですか。

倉林:それはないし、逆に、職員会議では校長に対してもっと情報を生徒に知らせるべきであると言う意見が数多く出されていました。

松本さん:要するに職場が民主的だから誰もが自分の意見が言えるし、それを管理職が力づくで抑えるようなことはしなかったということだと思います。組合員が8割以上



いましたから、民主的な職場になりますよね。私はPTAの係りをしていましたが、保護者が学校内でも署名活動をするので、校長が「松本さん、何とかならないかね」と言っはきますが、無理に抑えるようなことはしませんでした。生徒のためなら議論は保障されるのが当たり前の職場でした。当時はそのくらいの良識を管理職も持ち

合わせていたのです。多かれ少なかれどこでもそうだったんじゃないですか。

田口さん:後から考えると、この改革は高



市女の集団を解体する側面が非常に強かったと思えます。実際、私はいろいろな学校を回りましたが、学校

の企画委員長が分会長で、職員が主体的に動いている学校は余りないし、向こう側からすれば迷惑千万の存在だったのではないのでしょうか。高市女は教職員が自由で伸び伸びしているから生徒の自由や伸びやかさが出てくると思うのです。高市女の職員集団があったからあの生徒たちのパワーが出たと思うんです。

この年は私は転勤していなかったのですが、敵は上手い具合に崩したなと思いました。最初に出てきたのは男女共学で、それには私は賛成でしたから乗っていったし、男女共学のどういう学校にしたら良いのかというので、埼玉県伊奈総合学園高校の話を知るとそういうのもいいかなと思ったし、いろいろな改革に私なりに夢を馳せた部分もあったのです。実際には国鉄がJRになったみたいに、高経大附属案が出てきて、結局職員集団が解体させられていった。後で考えると、生徒を犠牲にして上手く立ち回られたという感が強くします。

松本さん:それは運動の中でも出てきました。PTAが要請行動に行くと、「あれは、先生方には気の毒だけれど高市女は日教組が多いから、それを追い出すためにやるんだ。みなさんには気の毒で申し訳ない」とはっきり言った市議会議員がいたのです。組合員が多すぎるといった別の議員もいましたし、市長も似たような発言をしていますね。また、別スジから私を思っていることですが、自重を促すような電話が入ったこともあります。

塚越さん:いま、当時から高経大附属に残



っている教員は3名になってしまいました。上岡校長が理想的な教育理念—制服の自由とか自主自立・自学自習・自治を育てる—

を掲げましたが、本当にそれが実施されていったらいいなとは思ったのです。実際は、附属を動かす主要メンバーが高市女みたいな「伸び伸び」になっては困るし、制服はきちんとしなければ外で見かけたときにだらしない格好になってしまふ。何よりも高高・高女と競争できるくらいの国公立の進学実績を上げることが生徒のためになり保護者の願いに応えることであるという方向を切り替えたのです。そういう中で、どこの学校もそうなっているのだとは思いますが、だんだんものが言えなくなって行きまし

た。職員会議でも、もう決まっていることなからというので承認だけが求められるようになりました。上意下達がまかり通るといえるのですかね。

若い人たちがすごく張り切っていますね。それはすごくいいとは思いますが、目標が進学率を上げることで、数字で出てきますからそれに生きがいを感じて頑張るようです。年がら年中、優秀な若い人たちが常に常に模試に向けてどう対策を採るかとか、勉強対策でシートをいっぱい作って、集め、スクラップする作業とか目標を何点超えたかとかに一喜一憂して嬉々として取り組んでいるのです。そういうことに驚きながら附属で教員生活をしています。

川崎さん:いま、附属では校則はできていますか。

塚越さん:校則は一時なくなったのですが、注意事項がいっぱい出てきて「生徒心得」になっていると思います。

川崎さん:それは生徒の意見を聞かずに先生方が作ったのですね。

Aさん:そうだと思います。

平野:時間がオーバーしてしまい、事務所から催促の電話が来てしまいました。会場の都合もありますので、次回にお伺することにして、今日はこの辺で終りにしたいと思います。

(文責：橋本)

〔付〕 答辞全文

本日は、私たちのためにこのような盛大な卒業式を挙げていただき、誠にありがとうございました。

高市女で過ごした三年間に悔いはありませんが、今は、まだ市女生でいたい、そんな気持ち一杯です。高市女最後の卒業式ということで、より一層さびしさがこみあげてきます。

高市女は素晴らしい学校です。寛大で、伸びやかで、明るくて、私たちはこの学校が大好きです。中学時代、ある者は自分の希望する進路の実現を目標に、またある者は部活に青春をかけるためにというように、それぞれの目的を持ってこの高市女を志望しました。だれもが大きな希望を抱いて入学してきました。そして高市女は期待以上に素晴らしい学校でした。

今年は私たちにとって自分の将来を考え、決定しなければならない年でした。いろいろな企業や学校について学び、悩んで、志望し、準備をして受験するというプロセスの中で、世間で言われている「いい」企業や「いい」学校が必ずしもそうではないことに気づきました。高市女がなくなり、高経大附属高校がつくられていくのと、私たちが将来について悩んだ時期が同じでしたので、そのような感を強く持ったのかもしれませんが。私たちは、企業や学校の特色についてずいぶん考えました。入社・入学案内のパンフレットなどを見ていると何ともいえない複雑な気持ちになりました。高市女で起こった定員割れも、高市女の良さをもっとアピールすれば

解決できたのではないかと思います。「何も七十年の伝統のあるこの学校を廃校にして、別学校にしなくてもいいのに」というやりきれない気持ちでいっぱいでした。

昨年六月、突然、高市女が廃校になり、高経大附属高校が新設されることを知らされました。しかも、在校生は高市女のまま高経大附属高校と同校舎で二校併設になるということでした。何かがなくなるというのはとても悲しいことです。しかも、大好きな高市女がなくなるということです。三年前、入学当初に誰がこんな事態を想像したでしょう。

高校の三年間は、私たちがOGとして過ごすこれからの人生と同じくらい重みのある大切な時間です。ですから、当然、高校生としてともに過ごした後輩たちのことを自分たちのことのように感じています。私たち三年生は当初高崎市立女子高等学校という名前がなくなることにはひどく怒りを感じました。「高経大附属になる」と聞いて入ってきた後輩に反発を感じました。しかし、時が経つに従い、少なくとも共に学んだ後輩たちが三学年そろった学校で学べるなら、高市女の名前がなくなっても我慢しようという気持ちになっていきました。私たちは後輩が伸び伸びできる環境を強く望みました。

不安と悔しさに満ちた長い日々が続きました。その間、先生方やPTAの方々、街頭で通り掛かりの市民の方々が私たちのために署名をしてくださったり、デモの協力してくださったりして、現高市女一、二年生を転学へと導いてくださいました。先生方とPTA、生

徒が一丸となつてかすかすの運動に取り組みました。こんなにまとまった力強い学校が、他のどこに存在するのでしょうか。こんな素晴らしい学校をどうして失わなければならないのでしょうか。

ブラウン管を通して自分たちのことを見、新聞で自分たちのことが書かれている記事を読み、どうしてこんなことになったのかと涙が止まりませんでした。この一年で私たちはこの高市女をととても愛していることを再確認しました。私たちはとても強い愛校心を持っています。そしてこれからもずっと高市女の卒業生であることを誇りにして生きていこうと決意しました。

今、高市女での三年間の様々な思い出が浮かんできます。高市女を目指して受験勉強に励んだ日々、それまでの人生で一番緊張したとも言える入学試験、そんなつらさも苦しさも合格発表で一気に吹き飛びました。毎日夜遅くまで準備に追われた菱華祭、力を合わせて折った鶴で作ったスローガンの「大胆素敵」の文字、当時生徒会長だった私は、前日や本番直前まで不安でいっぱいでした。でも大成功の菱華祭となったのはやはり高市女の素晴らしさだと感じました。言葉にならないほどの多くの思い出がこの校舎に詰まっています。いつも先生方や先輩・後輩、皆に囲まれて幸せでした。

先生方、私たちは先生方がしてくださった授業やお話の中から数多くのことを学びました。いつも私たちに一人の人間として接して下さったことに感謝いたします。各準備室では、教科の質問を受け付けてくださる

他に、ご自身の経験をお話になって下さったり、相談にのって下さったり、高市女はいつも先生と生徒の話し声や笑い声で満ちあふれていました。私たちの母校の名は今年度でなくなってしまいます。何か心の故郷を失ってしまうように思われ残念でしかたがありませんが、この校舎は残るでしょう。校名が変わっても、この校舎の中に一、二年生とともに先生方もお残りになり、卒業後私たちが訪れた時には今までと同じようにあたたかく迎えてください。

次に、在校生の皆さん、高市女は何らかの形でずっとずっとこれからも私たちをやさしく包んでくれると思います。私たちの高市女の心を大切にしていきましょう。また、本当に「未来にはばたく学校」を皆さんの手で創ってください。

保護者の皆さん、私たちは高市女に入学できて本当によかったです。ずっとあたたかく見守っていてくれてありがとうございました。

皆さん、私たちは今、未来に向かって出発します。このように多くの方々に祝福されて私たちは本当に幸せ者です。できるものなら永遠にこのままでいたいのですが、とうとうお別れの時間が来てしまいました。

さようなら。

最後に、皆様の御多幸と御健勝を心からお祈り申し上げ答辞といたします。

平成六年三月一日

高崎市立女子高等学校

第四六回卒業生代表 豊田 直子